

学位請求論文要旨

技術としての英語の専門教育と国際感覚

—女子英學塾・津田英學塾・津田塾専門学校・津田塾大学の卒業生の証言から—

平成 29 年 1 月

城西国際大学大学院 人文科学研究科

比較文化専攻

木藤 まどか

本論文の目的は、女子英學塾以来、現・津田塾大学に至るまで創立者津田梅子の教育理念は継承されているか、継承されているとすれば、それはどのように引き継がれてきたのかという問いを基に、卒業生の証言を通して、教育の特徴と成果をジェンダー研究の観点から、明らかにすることである。現在の津田塾大学の前身である女子英學塾を創立した津田梅子（1864年－1929年）が学生の育成・教育を通して目指した「all-round women」の理念とは何か、女性の自立とはどのようなものだったのかという問いを出発点とした。なぜなら、私塾・学校が創立した時に掲げられた理念には、創立者の考えが集約されており、調査対象となる学校の歴史を辿る際には基礎となる部分であると考えたためである。

本論文は、序章・第Ⅰ部（第1章から第4章）・第Ⅱ部（第5章から第8章）・終章から構成されている。

序章では、本論文の目的と共に、方法の中で筆者による本調査の概要を述べ、調査協力者の特徴について記す。本調査は、1930年から1969年までの各学年の卒業生¹を対象としている。方法は、事前質問紙と面談の2段階を基本形²とした。内容は、大学の記録として残されている資料からは読み取ることができない当時の授業の構成や指導法、教員との関わりであり、日々の学生生活の様子を中心に詳細に聴き取った³。

調査対象者の在学時の年限を1969年としたのは、この年が「津田塾」の学校史にとって節目となる変化があったためである。「津田塾」は第二次世界大戦の後に新制大学となり、名称も津田塾大学と改められた。その後、「津田塾」にとって戦後初めての新学科として国際関係学科⁴が設置された。国際関係学科の設置は、大学の規模が拡大する契機であり、本調査においては創立以来続く「津田塾」の学校史において節目になると捉えた。このような背景も踏まえ、本調査においては、国際関係学科設置以前の1969年3月までに同塾に在籍した卒業生34名への聴き取り調査⁵を分析する。

第Ⅰ部では、[<空間>としての「津田塾」を構成したもの：学生への「種」>]として、日本の女子高等教育史において初期に始まる「津田塾」⁶の教育は、女性のための教育

¹ 在籍時期を学校の名称の変遷で分けると、津田英學塾（1933年7月5日－）・津田塾専門学校（1943年1月30日－）・津田塾大学（1948年4月－現在）初期、に相当する。

² 協力者の負担軽減を考慮し、協力者にとって望ましい環境や方法で聴き取った。質問紙の質問項目は、在学時期に関わらず、当時の授業の構成や指導法、教員との関わりなどを手掛かりとして、学生の日常生活の様子を含む様々な事柄を可能な限り詳細に尋ねられるよう心がけた。面談では、質問紙の回答に必要な応じて追加質問をするほか、調査者が協力者に関して事前に把握している情報に基づき、個別に卒業後の進路・生活につながる質問を作成した。

³ 津田塾大学図書館・津田梅子資料室には、学生の生活の様子を知ることができる一貫した記録がないことから、本聴き取り調査では、日常生活の様子を含む様々な質問項目を設け、調査を計画・実施した。調査内容は、戦前・戦中・戦後それぞれの時期に在籍していた学生たちの生活の様子を知る手掛かりとして入学以前の生育環境、志望動機、入学後は寮生活または通学の様子、授業や学内の様子、指導方法、教員との交流やその後の進路などの共通する質問項目に加え、個別質問も設けた。このほか、当初予定していなかった貴重な逸話など、多彩な証言を得ることができた。

⁴ 1969年4月国際関係学科設置

⁵ 本調査の全協力者数は40名である。このうち、在学時の所属が現在の学芸学部英文学科の前身の所属であり、1969年3月までに「津田塾」に在籍していた34名を本研究における対象者とした。

⁶ 本研究では、女子英學塾（1900年9月14日－）の創立から、津田英學塾（1933年7月5日－）・津田塾専門学校（1943年1月30日－）・津田塾大学（1948年3月25日認可、4月－）まで、学校を指す総称として「津田塾」を用いる。なお、卒業生は母校を「津田」と称することが多い。

機関のひとつとして、いかに社会に貢献していたのかを考察すると共に、その教育環境を創り、支えたものを示す。そして、日本における女子大学創始者の教育理念とその影響に関する研究を検討する。

第1章では、第I部の構成を述べる。

第2章〔私塾設立準備から津田塾大学への歩み／歴史的概観〕では、1900年（明治33年）に津田梅子が創立した女子英學塾の設立背景、塾の創立から現在に至るまでの学校の歴史を学校名称の区切りごとに社会背景と共に辿っていく。続いて、学生が米国留学する際に大きな役割を果たした Japanese Scholarship に着目し、その奨学金制度の内容や果たした役割を検討する。Japanese Scholarship は、1893年から1976年まで、総数25名の女子学生に米国留学の機会を与えた。この奨学金制度は、奨学生⁷ひとりひとりへの配慮や支援が手厚く、女子英學塾創立以前に米国において津田梅子自身が準備を進め、給付を開始した。これらのことは、Japanese Scholarship の特徴であり、津田梅子の教育の考え方が表れている。そして、「津田塾」のカリキュラムの変遷と特徴では、「津田塾」を節目ごとに区切り、それぞれの時期の特徴を見ていく。具体的には、1900年の女子英學塾創立から約10年間の津田梅子自身が教育に携わった時期、津田梅子が病により教育現場から遠ざかった時期、そして津田梅子亡き⁸後の「津田塾」の教育が後継者である歴代の塾長・学長により引き継がれた時期に分けて、カリキュラムから見える教育目標を検討する。

第3章〔「津田塾」の同窓会（現津田塾大学同窓会）の歴史〕では、同窓会が設立された背景、「津田塾」の教育環境を支援する役割を持った同窓会の歴史を辿る。ここでは、津田梅子とも「津田塾」とも関わりの深い大山捨松（1860年－1919年）の存在にも触れる。大山捨松は、岩倉使節団女子留学生のひとりであり、津田梅子と共に米国に渡った。帰国後も梅子とは生涯の友として交流が続き、女子英學塾では創立の準備段階からの支援者として、同窓会では初代会長として尽くした人物である。そして、同窓会については、卒業生を取りまとめる組織という役割に留まらず、「津田塾」の少人数教育を維持し、継続するための財政的支援も目的としていた点に着目する。

1923年（大正12年）9月1日に発生した関東大震災後の復興の過程にも目を向ける。学校の再起自体が危ぶまれた状況下で、塾関係者はそれぞれに奔走した。日本で塾を守った吉川利一たち、塾復興の資金募集のために渡米し米国各地を回ったアナ・ハツホン⁹、安孫子余奈子¹⁰をはじめとする米国で生活をしてきた卒業生たちの尽力は、震災復興だけでなく、校舎移転後の運営にも助けになった。第二次世界大戦後には、新制大学として名称も改めた津田塾大学への支援とともに、津田英語会が果たした「実用英語教育」への貢献

⁷ 星野あい、藤田たき、内田道子のように卒業後には「津田塾」の教員ともなった者も少なくない。（のちに、星野あいは2代目塾長・学長、藤田たきは4代目学長を務めた。）

⁸ 1929年8月16日死去。

⁹ ハツホンは、1923年9月1日日本で被災し、同年9月28日塾の復興資金募集のため単身横浜を出国し、米国に向かった。

¹⁰ 安孫子余奈子は、梅子の実妹で塾の卒業生である。当時、サンフランシスコ在住であり、日本からやってきたハツホンを迎え、米国各地を回る募金活動を共にした。

を時代背景と合わせてみていく。

第Ⅱ部では、「津田塾」における〈国際感覚〉生成の道程：分析対象者の証言から]として、「津田塾」の教育理念、すなわち「女性の自立」を目指した津田梅子の教育観・同塾の教育理念の基礎がいかにかに形成されていったかという問いを立てる。津田梅子の個人として、教育者としての人物像を証言記録を通して示すと共に、塾の創立に際して掲げられた教育理念の下、初期の「津田塾」において教育を受けた卒業生に関する記録を検討し、津田梅子の教育理念はいかにかに築かれ、実践されていたのかを追う。

第5章では、第Ⅱ部の構成を述べる。

第6章〔技術としての英語の教育〕では、英語教育を検討するにあたり「英語を使う」とはどのようなことか、という言語教育の目的を考える。この問題意識を基に、「津田塾」の英語教育の実践を、卒業生たちの証言を通して示した。その結果、「津田塾」の言語教育において英語の習得は「技術」としての役割を持っていたと捉えることができ、大きく3点の特徴を示した。

第一に、国語教育の重視である。漢文などの古典を含む日本語に重きをおいた教育の実践を示した。第二に、添削指導である。実践的に使える英語を目指し、言語の構造を形づくる文法に重点を置いていたことを示した。先に挙げた国語教育同様、英語の指導においても、言語の枠組みの理解に重心をおいており、このときに不可欠だったのが、ときには個別対応も含む添削指導であった。第三に、授業で使用する言語の使い分けである。英語の専門教育を行う教育機関でありながら、国語教育を重視してだけでなく、さらに、授業中の使用言語も選択的に日本語を用いていたことを示した。ここでは、「時事英語」というひとつの授業を取り上げた。この「時事英語」は、ひとりの教員が専門学校時代から新制大学の初期にかけて授業を担当しており、本調査においては学年が異なる複数の卒業生の証言により約20年間の授業の様子を聴き取ることができた。

第7章〔リベラルアーツ教育〕では、「津田塾」で行われてきた英語の授業以外の特徴を「知」と「人」という2つの観点から捉える。そして、「津田塾」の「リベラルアーツ教育」を協力者たちの証言を通して検討することで、生徒・学生たちに与えた教育・その環境の意味と共に、「津田塾」という〈空間〉を構成したものを示した。

多様な個性を受け入れた「津田塾」の環境と卒業生のその後の進路に関しては、本調査の協力者である「津田塾」卒業生たちやその友人たちの「津田塾」への志望理由・背景を紹介した。例えば、英語教師など身近にいた「津田塾」卒業生が職業を持つ女性のロールモデルとなっていたこと、その人物の出身校を進学先として希望した結果「津田塾」に辿りついたこと、自身は必ずしも英語が得意ではなかったが専門性の高い教育環境を望んでいたこと、これらを含めた女性のための高等教育機関が限られていた時代的・社会的背景、などである。そして、娘や妹の将来にひとりの人間としての「自立（自律）」の重要性を考えていた父や兄たちといった家長の存在も明らかになった。彼らは、評判として伝え聞く「津田塾」の教育環境や卒業生を通してうかがい知る教育内容とその成果を通して、「津田

塾」の教育の理念や特徴に将来の女性像を見出し、娘や妹に「津田塾」への進学を後押ししていた。「津田塾」入学までの経緯を聴き取ったことにより、卒業生たちが、卒業後「津田塾」の特徴である英語とは異分野と捉えられる分野で活躍する背景として、学生たちの多様な個性を受け入れた人材養成の場として「津田塾」が果たした役割が明らかになった。

第8章では、第Ⅱ部のまとめとして、「津田塾」の英語教育の文化的教養としての役割とリベラルアーツ教育の成果として多様性の受容が〈個〉の意識の自覚へと深化していく過程を示した。また、「津田塾」にみる女性の高等教育と「しごと」観についても論じた。本論文で示す「しごと」とは、いわゆる職業・生業となるものを意味するだけではない。有償無償に関わらず、自分から率先して、または依頼され引き受けた役割で、割り振られた自分の役目を果たすべきもの、これを総じて「しごと」と捉えた。

終章では、[本研究の意義とその限界、及び課題]として、津田梅子が目指した教育理念を具体的に示し、教育の特徴と成果を3点挙げジェンダー研究の観点から考察を述べた。

一点目は、社会的貢献の意欲と実践である。国語教育を重視した英語教育とリベラル・アーツ教育の成果としての国際感覚の生成の過程が〈個〉の意識の自覚につながっていた。

二点目は、「技術」としての英語の教育が「人間形成」につながっていたことである。性別を超越した個人として確かな「技術」として英語を習得する過程には、ひとりの人間として一流になることを目指し、それを可能にする環境があった。

三点目は、「津田塾」が目標としていた「自立（自律）」した女性を育成する教育が、女性だけでなく男性にも受け入れられていたことである。進学先として「津田塾」を検討し選択するとき、調査協力者たちは、家長の役割を果たしていた家族の助言を受けていた。家長の多くは、父親あるいは兄で、本調査で明らかになったのは、娘や妹の将来やその後の人生を見据えて教育を考えていた男性たちの姿であった。彼らは、これからの女性の生き方を考える上で新しいジェンダー観の具体的なかたちとして、性別ではなく人間を〈個〉として考え重視する教育を受け入れ、娘や妹を「津田塾」に送り出していたことが明らかになった。

本論文は、津田梅子が目指した英語教育は、女性が仕事を持ち自立することが困難であった時代に、自立につながる将来の専門職への足掛かりとなるだけでなく、職業人となるかどうかにかかわらず、学習過程で得た広い視野と深い学問的探究の姿勢が、人生において〈個〉を意識する体験となること、その体験から得た多様性に対する寛容さは、個々の女性の立場を解放、飛翔させるための手段となって活かされたことを明らかにした。そして、このような自律した個人を育成する女性のための教育は、日本の男性たちにも新しいジェンダー観として受け入れられていたことを示した。